

---

# ネギま! ~もう一人の子供先生ウルま!?(仮)

ユキ & レイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！～もう一人の子供先生ウルま！？（仮）

### 【Zコード】

Z0736Q

### 【作者名】

コキ&レイ

### 【あらすじ】

魔法学校を卒業した主人公、ウルル・エルフィード。彼はネギ君とお友達。卒業後の試練、それは

ネギ「日本で…先生をやること…」

ウルル「（ワシントン…え…？そんなネギ君と違う…）」

「ごちやごちや他のみんなが言つてゐるうちにウルルは文字の上から魔法で塗る。

ネギ「ねえ、ウルルは？」

ウルル「僕も同じだよ。」

『日本で先生をやる』に塗り替えた。精密に隠蔽する薬までつかつて…

## プロローグ（前書き）

どうもどうも、雪の変人といいますです。

ネギまでは初めて書きます。まだまだ拙い所も多々ありますが、よ  
ろしくです^ ^ ^

## プロローグ

僕の名前はウルル・エルフィード。

僕はウエールズの魔法使いたちの住む村に生まれた。  
僕は俗に言う『天才』というも…らしい。

僕の両親は「悠久の風」に所属し戦闘能力A+を誇る戦闘のプロ。  
でも僕はそんな両親をもつてはいるけど体が弱く、運動ができない。  
ならなぜ天才か。それは祖父ゆずりの『知能』のほうだ。祖父は普通  
ならありえないが一歳以下のときに自我をもつ、言葉のキャッチ  
ボールができるなど、ものすごいかっこい、いや『天才』の域をこ  
えるような人だったと聞いている。僕もそう。僕は一歳の頃から記  
憶をもつ、しかも完全記憶能力だった。

僕は一歳の頃、父にたずねた。

「おとうさん、どうしたらおとうさんみたいにつよくなれるの？」

「ん…かしこいウルのことだ、勉強して体を丈夫にしたら…」

「あなた、そんなこと言つてもウルにはわからないでしょ。」

そんなどうか。そこで僕は学ぶことに専念した。

家にあつた魔導書を読み漁つた。でも魔法のことがかかれたものは  
なく『魔法薬』の書はいっぱいあつた。だから僕は魔法薬や、発動  
媒体やらと書いてある本を上手く、子供とは思えないような技能で  
読んで覚えていった。そのうちにお父さんから、体が弱いのを克服

するためにと『氣』の使い方も教わった。このときは長い間使つことは出来なかつたが次第に継続できるようになつていつた。

僕が一歳になる頃、僕は1人の、英雄と呼ばれる人が訪ねてきた。

「へえ～…」いつがお前たちの子か…」

「…というか『ナギ』、お前生きてたのか…」

訪ねてきたのは『ナギ・スプリングフィールド』という人だつた。一応家にも歴史の書があつたので名前は知つてはいた、が死人とされていていたので僕はものすごく驚いた。

「…俺の子より1歳下か…よし、ウルル…だつたか?ネギつていう俺の息子にあつたらよろしくな。」

それだけいつて僕の家から出て行つた。

「おい、ナギ!」

その後数ヶ月たつて事件が起つた。

とある村で悪魔の襲撃だつた。

僕の両親はその事件の加勢に行つてしまつた。その時、両親は死んでしまつた。と聞かされた。

その時からだろうか、僕はものすごい臆病、怖がり、弱気…かなり引っ込むようになつた。

僕は親を失つた時、一時的に魔法学校の校長先生に引き取られた。と同時に入学まで。

僕は入学したのはいいけどずっと家に引きこもっていた。外に出るのが怖かった。

そこで校長は世話係のこと一人の男性を僕の家に送ってきた。

「やあ、君だウルル君だね。」

その人の名前はディフォルト・ワインザード。当時はまだ11歳。彼もまた、両親を失い校長に引き取られた人らしい。

彼は僕を何度も学校に行かせようとしていた。僕は嫌がった。でも数ヶ月経つて僕は折れた。学校に行くことにした。

学校というものは書物で知つてはいたが来たのは初めてだった。た

くさんの部屋、本、人…

僕は最初は注目の的だった。2歳児が普通『学校』などには行かないからだ。

ふと僕は一つ思い出した

『強くなるには…』

『勉強をして…』

僕は図書館で勉強するようになつた。当時、僕は魔法薬に関しては右出るもののがいなかつた、いや、僕が卒業するまではずっと僕が一番だつた。

そして僕が3歳になる頃、学校に『ネギ・スプリングフィールド』という人が入学してきた。

僕は当初は関係ないと思っていたけどふと一つの言葉を思い出す。

『ウルル…だつたか？ネギっていう俺の息子にあつたらじょしくな

この言葉を言ったのは確か『ナギ・スプリングフィールド』という人だつた。ということは入学してきた『ネギ』というのはその人の息子なんじゃないか、と考えた。

でも僕はその人にあう勇気がなかつた。僕は怖がりのままだつた。このときまだ一回も教室には入つたことがない。ずっと図書館に籠りつきり。あつたことがある人はデイフォルトだけだ。

ある日、図書館に勉強しに来た一人がいた。僕は来たときに隠れてしまつた。

その日彼らは夜までいた。

「ネギ～まだ～？」

「うふ～…もうちょっと…」

その時、彼がネギであることを知つた。でも僕は話しかける勇気なんてものはなかつた。

ガタツ

僕は隠れようとして動いたときにはいすに当たつてしまつた。

「誰ー？」

ネギ君が気づいた。僕はすぐに見つかった。

「え…？僕より年下…？」

そう、僕は魔法学校では最年少、多分公にはされてないと思つので

そのときは知ってる人はデイフォルト一人のはずだった。

「君……もしや・ウルル……君？」

しかし何故かネギ君は知っていた。隣にいた女の子は知らない様子で「誰？知り合い？」などと言っていた。

僕は首をたてに振つて答える。その時僕は縮みあがつていた。

「怖がらなくともいいよ。僕はネギ・スプリングフィールド。」

「……なんで僕のこと知つて……」

僕はこのときはわからなかつたが次の言葉で理解する。

「お父さんがね……」

ネギ君のお父さん……ナギ……その人が僕のこともネギ君に教えたのだ  
うづ。

「えつと……僕、ウルル、ウルル・エルフィードつていいます……」

それから僕は初めて、デイフォルト以外の人と打ち解けた。  
僕たちは勉強仲間みたいなものだつた。教え合い、試しあう。いろいろとやつた。

このときあたりから僕は授業に出るようになつた。が基本的に図書館で勉強したところだったのでずっと復習みたいなものだつた。

僕は6歳になつた。その時、事故が起きた。デイフォルト君が実験

に失敗し右腕を失つた。

爆発が起こり障壁を満足に出していなかつた彼は守ることが出来ず肩から先、右腕すべてが消し飛んだ。

その後、彼は昔の僕みたいに引きこもつてしまつた。腕は返らない。彼は絶望してしまつたのだ。

僕は彼を元気づけようとした、が彼は何も聞き取らなかつた。ただ

「この腕さえ戻れば…」

という言葉が静かな場所に鳴つた。

僕は今までの知識を元に義手を作ることにした。

粉々になつてしまつた腕を治すのは難しいとしつついたので作ることにしたのだ。

数ヶ月かけた。僕は普通の腕を再現した腕を作り上げた。僕はそれを彼の元へと持つていつた。

「ねえ、ディフォルト、入るよ。」

僕は入つて彼に義手も見せる。でも彼は何も言わなかつた。僕はつけてもいいか尋ねた。答えは「勝手にしろ」だつた。

腕をつけて僕は神経を義手につなぐために特殊な術式を施した。

「多分これで大丈夫…。動かしてみて。」

彼は義手義足は不便なものと思つていたらしかつた。彼は腕をゆっくりと動かすと

「ん…?なんだ…」

ぐるぐると動かす、まるでふつつの、本物の腕のようだ。

「す、…これは…」

彼はす、…と喜んだ。そして元気を取り戻し、学校へも出始めた。このときからか、僕は彼をデイルと呼ぶようになった。

それから一年後僕、ネギ君、デイルは卒業する。

## プロローグ（後書き）

適度に更新していくます^\_^

一応原作に従順に書くつもりですが、といでいぢりオリジナルが混ざります。

では、また。

## 1限目 今日から僕は先生でー？（前書き）

はいどうも、雪さんです^ ^

書いてて思ったのですがネギまで書くのってすうごい難しいですね。

原作に沿つってだけでものすごく難しいです^ ^；

でもがんばって続けていきますです、はい。

では、拙い文ですが、どうぞ、

## 1限目 今日から僕は先生でー!?

僕は魔法学校を卒業した。そのときの試験として『えられたのは『ワシントンでホワイトハウスのSAPをやる』だった。

「日本で…先生をやること…」

ネギ君はいつもだつた。僕は違つことに焦つた。そして僕は魔法で書き換え、魔法薬で隠蔽した。

「ねえ、ウルルは?」

「僕も同じだよ。」

僕の卒業証書に書かれたのは『日本で先生をやること』に書き換えられた。

「ん、君たちも日本で先生か。」

そこに僕のお友達…ディル、ディフォルト・ワインザードが来た。

「え? ディフォルトさんもですか?」

「さうだよ、ほら。」

そういうつて卒業証書を見せる。そこには『日本で先生をやること』と書かれていた。

「同じ学校でつてことならいいんだけど……」

僕はふと口走った。そんなことないよな、と思ってしまったから。すると、後ろのほうから

「安心せい、皆同じ学校じゃ。修行先の学園長はワシの友人じゃから。ま、頑張りなさい。」

僕は安心した。一人だけ違うとかだつたらどうしようとか思つてたから……

「 」「 」「はい。」「 」「 」

その後、僕たちは日本へと飛び立つた。

僕とデイルは日本に到着した。ネギ君はなんでも一便早く行つてしまつたらしい。

「僕たち、遅刻かなあ。」

「まあ遅刻は遅刻でしかなないさ。」

「そうだね。にしても

「人、多いなあ……あう……」

僕はいまだ人にあまり慣れなかつた。こんなで先生なんてやれるのか、と心配なくらい。

「さ、ウルいくぞ。」

「あう～…」

「ん？あ、そうか…よし、ウル、鞄からあれを出してくれ。」

「え？…ああ、うん。」

僕はあれ…小さなビンを取り出す。中には「…」チュアのよつた車が入っている。

「ウルも早く人になれないとな。あ、認識阻害と人払いも。」

僕はフイールドを展開し人がいなくなるのを待つ。

「にしてもウルの技術はすごいな。そんなんでも携帯できる小瓶とか…」

この小瓶、ふたを開ければなかを取り出せる仕組みになつてゐる。

「そんなことないよ／＼んじゃ、だすよ。」

ふたを開けると中から車が出てくる。そしてそれに乗り込む僕たち。

「あ、行こ。」

僕らは目的地、麻帆良学園へ車を走らせた。

一応ルートは送られてきたパンフレットに地図が同封されていたの  
でわかった。なるべく短時間でつくために一番短距離のルートを選  
ぶ。

「そこを右、次に左……」

「にしてもウル、僕の運転によく耐えれるね。」

この台詞、実は今の車の速度は100km/h。認識阻害やらでだ  
れにも気づかれてはないがぶつかることがあるので心配だ。でも

「だつて昔からテイアルの運転こうだったもん。」

そう、ほんの1年前に免許をとったばかりだといふのに彼はものす  
ごい運転の仕方をする。そして僕はいつもその運転に付き合わされ  
た。だからもう慣れてしまったのだ。

「あーそこ左……」

「わっとー。」

思い切りハンドルを切ってドリフトのよひじて曲がる。全く……危  
ないつたら……

「あ、ここだな。」

女子中等部。書かれた範囲に入った。車を一旦止めてあたりを見る。と

「おや、遅い到着だね。ネギ君と学園長がお待ちだよ。」

そこにいたのは僕も一度、ネギ君と一緒に会ったことのある

「あ、タカミチさん。」

「え？ 知り合いなのか？」

横にいるティルは驚いている。それもそうだ。だって彼はタカミチさんに会うのは初めてだもの。

「まあちよつとした仲さ。や、学園長室に急げ。」

そつ言つて振り返り歩き出すタカミチさん。僕は車をしまいすぐについていった。

学園長室前

「高畠です、もう一人、ウルル君とティーフォルト君をお連れしました。」

『おへ着いたか、入りたまえ。』

「そ、一人とも行くよ。」

僕らは中へと入った。

「お～お～君がウルル君とディフォルト君かの。」

僕のほうとディルのほうを交互にみてねらりひょんみたいな老人が  
いう。

「む、なにか失礼なことを考えなかつたかの？」

「ふえ！？なんでもないです！？」

なんでばれたんだろうと想いつつも前の老人を見る。

「まあいいじゃろ。もうネギ君には説明したが君たちは教育実習と  
ゆーことで今日から3月まで教師をやってもらうのじゃが……教科と  
かはもう言つてあつたかの？」

僕とディルは顔を見合させてから首を横に振る。

「そつか……えつとじやな、ウルル君には世界史と図書館司書、あと  
ネギ君のクラスの副担任をしてもう。ディフォルト君には保健体  
育と保健医じや。一応じやがネギ君は2・Aの担任と英語じやよ。」

「ふえ……なんか僕だけ多いよ、うな気がするような……

「ふあつふあ、すまんのウルル君、君は本が好きとのよくな事を聞  
いての、じゃから図書館司書を頼むことにしたのじやが……いやじや  
つたかの？」

「ふえ！？えと…大丈夫です！やります！」

そういうことで僕の役職とかが決まりました。

「あとな、一人とも、この修行はおそらく大変じやぞ。ダメだった  
ら故郷に帰らねばならん。一度とチャンスはないがその覚悟はある  
のじやな？」

「はう…そんなフレッシャーかけなくとも…

「はい、僕はやります。」

デイルはすぐに答えた。

「ふむ、ウルル君はどうかの？」

「あう…が、頑張ります…！」

僕も負けてはいられない…けどあんまり自信ないなあ…

「…つむわかった。では今日から早速やつてもらおつかの。指導教  
員のしづな先生を紹介しよう。しづな君。」

「はい。」

後ろのほうから声がする。そして扉がひら

「へうー…？」

「あ、う、うんなんや。」

## きれいな女性

「わからないことがあつたら彼女に聞くといい。」

「おへしひ」

「えう… は、はい／／／」

「お、アハハ、ちびちゃん。」

僕はしづな先生から離れて話を聞く。よじで「あら、残念。」としづな先生が言つたような気がしたけど…気のせいかな。

「ウルル君は図書館司書室、ディーフォルト君は保健医待機室で寝泊りして…ネギ君なんじやが…このか、アスナちゃん、しばらくネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの。」

一  
げ。  
二

学園長の言葉にだまっていた一人の女生徒が反応する。

「わつつーなにからなにまで学園長——！」

「まあまあ明日奈、かわえーよ、」の子。

「ガキは嫌いなんだつてば！」

あう……この人怖いよ……

「ねえ、デイル……僕頑張れるか不安になつてきただよ……」

「まあ、頑張れ。」

「へう……そんな……」

「ごちやごちや言い合つてから生徒一人とは離れ、いるのはしづな先生とネギ君、デイル、僕の四人。」

「さて、僕は保健室のほうに行くかな。」

「保健室はここを降りて左よ。」

「ありがとうございます、しづな先生。」

「そう言つて、デイルも持ち場に行つた。」

「ネギ君はネギ君でなんか緊張してなさそうだし……あう……」

「さ、ウルル、行こつー。」

「いつのまにか僕は教室の前に立つていた。はう……緊張が……」

「すっとスキマからクラスの中を見る。ざわざわとしているんな人が……」

「あう……僕、やってけるかな……」

「大丈夫、ウルルならできるよーあ、そりだ、これクラス名簿。」

僕は名簿に目を通す。と総勢31人の年上の女人の人…はう…なんか  
もつと緊張してきちゃつたかも…

「僕もドキドキするけどウルルと一緒になら大丈夫な気がするんだ。  
だから頑張りうー！」

あ、ネギ君…うん。

「うん、僕頑張るよ。」

決心した。僕でも頑張れる。そう信じて。

「さ、行くよウルル。」

そう言つてネギ君は扉を…

「あ、ネギ君危ない…」

僕は黒板消しトラップに気づいたんだけど言つのが遅かった。

ガチャ！ゴガ！ガガガ！

盛大にネギ君はトラップにはまつてしまつた。  
教室は笑いに包まれた。

「あらあら。」

しづな先生も苦笑いしている。  
と笑いが止まる。

「えつ……」「あ……あれ……？」

「えーっ！子供！？」「君大丈夫！？」「じめんてつきり新任の先生かと思つて。」「

ネギ君が生徒たちに囲まれる。はわ……僕こんな状況無理だよ……

「いいえ、その子があなたたちの新しい先生よ、あとこの子もね。」「

そう言つて僕も前に出される。

「ふえー？あ、えと……あの……／／／」「

「そ、ネギ君もウルル君も自己紹介ね。」「

「「は、はい。」「

みんなが席に着き静まつたところで自己紹介。

「ええと、僕、僕、今日からこの学校でまほ……英語を教える」となりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願ひします。」「

ネギ君の自己紹介が終わる。次は僕の番だ……あう……

「えつと……その……ぼ、僕はウルル・エルフィードって言います。担当は世界史と一応図書館の司書です……ネギ君と同じく3学期の間だけだけど……よ、よろしくお願ひいましゅー！あう……」「

一回静寂……そして……

「 」 「 」 「 」 「 キヤーッ！…可愛い～！…」 「 」 「 」

ほぼ全員の生徒が僕とネギ君に押し寄せてきた。僕とネギ君はもみくちゃにされる。

いろいろな質問をされたり抱きしめられたりと。中には「この子もらっていいんですか?」としづな先生に質問している生徒もいた。その中で僕は耐え切れなくて氣を失ってしまった…。

僕は気がつくと保健室にいた。

「 まつたく、ウル、君はどれだけ人に弱いんだい?」

「えう…ごめんなさい…」

あう～…だつて…あ、そういうば…

「 今つて何時?」

「 そうだな…そろそろ授業が終わる時間か。放課後になるな。」

「 ふえー? 僕、そんなに寝てたの? ? わわ、HRに行かないと…」

「 えつと、ありがとデイル。僕、教室に行かないと…」

僕は保健室を飛び出した。

「 まつたく、ウルも苦労人だな…何かいい精神的治療でも考えてみ

るか。」「

キーンゴーン…

HR終了のチャイム。僕は教室でネギ君の連絡事項だけ聞いて、このあとの活動である図書館司書のために図書館に移動することにして…

「あ、そういうえば僕まだそこまで把握してないや…」

行き方を知らない。と、ふと名簿を見たときのこと思い出した。

「27番、高崎のじかさん…学園総合図書委員…」

僕は案内してもらおうとした。けど話しかける勇気がなかった。

「あう…どうしよう…」

「あの…ウルル先生?」

と僕に後ろから話しかけてきた。

「はわつ…?だ、誰?…」

振り向くとそこにはのどかさんがあった。

「す、すみません!驚かすつもりはなかつたんですけど…あ、お体は大丈夫ですか?朝からずっと保健室にいたみたいですが…」

「あ、えと、大丈夫…です／／」

僕は氣絶したことが恥ずかしかったので少してくれてしまった。あ、そつだ。このまま…

「あの、えつと、のじかさん、ですよね？」

「え、先生もう覚えてくれてたんですか？」

あ、そつか、まだ一日だし覚えることって少ないのかな？

「えと、その…僕覚えるのは早くって…その、名簿見たときにその…」

「す、すごいです…あ、先生そついえれば図書館司書なんですよね。よろしければ一緒に…」

「お～、のじか、もうウルセンセニ～？～」

そこには1-4番の早乙女ハルナさんが…

「え？／／／そんなんじゃないよ！／／／」

「そんなに照れなくてもいいです。私たちはわかつてますよ、のどか。」

もう一人、4番、綾瀬夕映さん。

「もう、違つてば！／／／えつとウルル先生、よろしければ図書

館まで案内します……」

そつこつて僕の手を引っ張つてこの場から走り出した。

どこの廊下……

「あ、やつこねば図書館に持つていかないといけない新刊があるんでした。」

ふとのどかさんがそつ脱こ出す。

「えつと、じやあ僕も付き合こますね。い、一応図書ですしつ……」

「あ、ありがとうございます。」

そつこつて職員室のまづく届いた新刊をとつこ行き。新館をもつて歩き出す……のどかさん。

「えと……僕も手伝つたまうが……」

「だ、大丈夫です……。」

はたから見るとふうふうして危なつかしい。僕は見かねて  
「や、やります……。」

僕の勇気をだした瞬間だった。

「ふえ？ウルル先生？？」

僕はちょうど半分くらいを取つて持つ。あう、ちょっと重いかも……僕は体が弱いのでちょっとふらついた。でも氣づかれたらまた「いいですよ。」といわれると思つたので『氣』をつかつて自身を強化した。これもそんなに長くもつかわからない、ので

「ち、い、行きましょ、う。」

僕たちは図書館へと急いだ。

## 図書館の前

「これが図書館……なの……？」

島一つに建物がたつてゐる。図書館島といつらしい。とりあえず新しい書をしまうためにのぞかさんと新刊をしまうスペースに行き、ちゃんと順に並べた。

「ウルル先生、ありがとうございます。手伝つてもらつちゃつて……」

「あう、その、一応先生だしその、司書でもありますからその…あ、  
そうだ、僕のことはウルでいいですよ? その、かんじやいそうです  
よね?」

僕は仲良くなれそうな人には『ウル』とよんでも「ひつひつ」と言つても『イヤル』しかそう読んでくれない。ネギ類にもウルでいひつて言つたのに何故かウルルのままだし…

「えと…いひんですか？」

「は、はい…へへ」

「えと…ウル…センセ…？」

「はい…なんじょひ…」

「な、なんでもないです…」

その後、同書室に移動し本の「」とかで話しあつてこたら時間はどんどん過ぎていつた。

「あ、そつだ先生、教室に行きましょ！」。

いきなりの提案だった。

「ふえ？ 何か忘れ物でもしたんですか？」

「えと、その、そんなどです…（歓迎会やむつひまつひやダメ…なんだよね…）」

とこり」とド僕とのびかさんばー・Aの教室へと移動する。

途中の廊下

僕とのどかさんは話しながら歩いていると前に見た顔が…

「読心術か……それを上手く使つて……」

そこにはネギ君とアスナさんだった。 あう……あの暴力的な性格の人  
つて苦手なんだよね……

「あ、ウルルー...」うつむき眼鏡室にいるものかと...」

「え？ ど、のどかさんの忘れ物をとりに…」

一ネギ！荷物取つてくるからそこで

ガラスとドアを開ける すると

僕とネギ君とアスナさんは固まつた。そして

「そーだつた今日歓迎会するとか言つてたんだ。忘れてた。」

とアスナさんは言った。のどかさんはくすくす笑って

「ハルゼン博士はおもむろに立ち止まつた。

そう言って僕はのびかさんに押されて中へと入つていった。

「あーっ 本屋がもうウル先生と仲良くなってるーーー！」

「えっー？ そんな…あと私本屋じゃないですかーーー！」

アハハハハと笑うみんな。うん、楽しそう。

このあともいろいろやっていた。雪広さんからブロンズ像のプレゼントがあつたりなんだかネギ君がアスナさんとなにかしてたり最終的にアスナさんでてつてネギ君はそれを追いかけて…

「や、ウル君、お疲れ様、と言ひても氣絶してたらしいね。」

「あー… タカミチさん…」

そういうて笑うタカミチさん。だつてまだたくさんの人囲まれるのになれてないんだもん…

「まあウルだしな。これから頑張ればいいんじゃないか？」

と、ここにはいなはづのデイルの声…あれ？

「なんでデイルいるのーーー？」

「ああ、タカミチさんに呼ばれてな。やつに呼ばす」こじやないか、タカミチさんってあの…おつと、ここではいえないな。またあとで。

「そんなタカミチさんとか、僕のこととは呼び捨てでかまわないと…」

「いえ！そんな。タカミチさんを呼び捨てなど。これでも譲歩します！ほんとだったら様付けでも…」

「それは…まあいいよ。」

なんかデイルの変わりよう… タカミチってそんなすごい人だったつけ…？

そんなこんな話してデイルとタカミチさんは離れていった。

その後もなんやかんややってその日はお開きになつた。なんだかみんなすゞいはしゃぎようだつたな… 途中でネギ君とアスナさんがいないのに気づいてものすゞい勢いで探しにいって…廊下のほうからすゞい声がして…

「すゞいな… 僕もあんなふうに…」

僕はその日、司書室で日記を書いて、すぐに寝ることにした。

## 1限目 今日から僕は先生だー? (後書き)

はい、お疲れ様です^ ^

かなり書くの難しいですね^ ^

他に書いてるもののはうが簡単なのかわかりませんが上手くかけない感じがします。

でも頑張つていいく所存ですので、応援してくださる方はよろしくお願ひしますです^ ^

では、また次回、お会いしましょ^ ^

よろしければ^ ^意見、^ ^感想など書いてくださいね^ ^

そういうれば書いてから同じような題名の作品があることに気がついた今日この頃。

## 2限目 新薬『思い込み薬』（前書き）

はこどーも、コキさんです^ ^

いやはや、センターおわって人生も終わりたいとかおもつたり（嘘）

今回、今まで書いた中で一番長いです^ ^ ;僕のほかの作品を比べたら2倍量くらいあります（1話分）

今作はほぼ原作どおりにオリジナルを混ぜて提供しておりますのでご注意を。  
では、2話目、どう^ ^ /

## 2限目 新薬『思い込み薬』

僕は日記を書いてから寝ようとしたが、ベッドに向かつたとき...

「ウルル！」

バンツヒドアを思い切りあけて入ってきたのはネギ君だった。

「なに? どうしたの?」

「そ、それが……」

説明を聞くとクラスのアスナさんに魔法がばれてしまつたらしい。でも黙つてはくれてゐるようでなんかでおかえししたいとか。で惚れ薬とかできなかと相談にきたとか。

「あうー…惚れ薬は作っちゃダメなんだよね…」

「え？ そ、うなの？」

「うん……捕まつちやうみ。犯罪だし……あ。」

僕は一つ、オリジナルの薬を思い出す。これなら別に惚れ薬とかじゃないからいいよね。」

「ネギ君、明日までにいいもの作っておくね。だから、今日はかえつて……ふあ……寝ていいよ。」「

言つてゐる最中にあくび。僕も今日はずつと寝てたはずなのに疲れるみたいだ。

「ほんと？ ありがとウルル じゃあお休み！」

そういうて颯爽とさつていつたネギ君。

ふあ……眠い……時間は今は午後2時……23時？……まあいいやあ

「別荘つかおうかなあ……」

僕は長年かけて作った『別荘』、中での一日が外での2時間になるといつ魔法具。僕の魔力じやこれが限界。もつと魔力をためられる『器』があれば一日が1時間とか作れたんだけど……

『別荘』は僕が司書室に作った地下室においてある。流石に司書室にそのまま置いておくのも危ないからね。

「ち、確かあの薬は作るのに10時間はかかるんだよね……」

早速僕は別荘に入つて『あの薬』の作り方を書いたレシピを出してきて作業に取り掛かつた。

が眠かつたので一旦眠ることにした。

10時間くらい寝たのちおきて早速作業をすることにした。

「えつと……これと、これ……あとこれも……」

いろいろな常備してあつた魔法薬をまぜ、それに材料を加える。この薬、出来たらなんか青汁みたいな色になる。さすがにそれは飲む気なくなるだらうから着色する。うーん……お茶のいろ？ 薬つて感じ

じゃないかな… 黄色?… あ、ピンクとかいいんじゃないかな??  
ということで僕はピンクになるように着色料を加える。

「あとはこれを7時間放置して… そのあとに… これを加えて煮て…  
で固まらせて切って固形にして… 使うときは水に溶かしてつかうつ  
と。」

僕は確認だけして7時間放置。その間に僕は一応食事とか勉強とか  
お風呂とかを済ませようと行動する。

「まずはえつと…」飯かな。」

寝ていたものだからおなかがすいている。僕は軽く適当に朝ごはん  
レベルの料理を作る。ハムエッグにトースト、ホットミルクティー…

「いただきます。」

僕は食事を始める。ここのことからディルに料理を任せっぱなしにな  
たから失敗するかもと思つたけど意外と上手くできたのがうれしく  
てどんどん食べていけれた。

食事を終えると僕はとりあえずお風呂に入ることにした。

「タオルと着替えと…」

僕はお風呂が大好きだ。すつきりするし疲れが抜ける。あう、なん  
かおつさんぽいかも…。そういえばネギ君はお風呂嫌いだったよね  
… なんで嫌いなんだろう… そんなことを考えながらお風呂に入る。  
まずは浴槽に入る前に頭と体を洗う。これからだ。

「あう… 髪の毛切らうかなあ…」

いつもは短く見えるように工夫してるけど一応長い。最後にいつ切ったか覚えてない。長さは腰くらいまである。基本的に魔法薬で短くしてるのであれも一寸しかもたないやつだし…

「最近は効き目が短いかな…」

抗体でもできたのか一寸もたないときもある。そろそろ切るかそれとも…

「もうそのままでもいいかな…」

わざわざから『なあ…』ばっかり…悩みすぎ。よし。

「デイリに相談しよ。」

とこ「う」とで髪の毛を洗い終わる。これだけで10分以上かかる。次いで体。これもきれい好きなので10分は絶対かける。今日はそんない汗をかいてないはずだから10数分だった。体を洗つていると毎回思つことがある。

「僕もへんな失敗したなあ…」

僕は男の子…のはずだ。なのに今、体は女の子。ちなみに昨日は男の子。その前は女の子。

「なんであんな変な薬できちやつてしかも…」

変な薬、それはお父さんの書棚にあった本の中に名前のない薬の作り方があった。それに興味を持った僕は昔、というか一年前に

作ったんだけど…

「一曰千」と性が変わる薬…くう～…」

ちなみにこの薬、僕が入れるものと間違えていたみたいなので僕は失敗したと思う。多分あれは普通に性転換する薬だ。『無限草』といふものを入れないといけないのを外見の似ている『一曰草』といふものを入れてしまった。完成したのだが僕はその薬をかぶつてしまつた。それから、僕は一日一日で違う性で過ごしていた。

「はう…無限草があれば元に戻れるのになあ…」

そう、『固定』するのに無限草がいるらしい。一曰草は周期的に咲くが無限草は咲いたらずっと咲き続ける。この継続の部分が固定の作用と同じらしい。

「まあでも外見変わんないしばれないよね…成長しない限り…」

とりあえず考えるのをやめて僕は湯船につかり、數十分はお風呂にいた。

お風呂から出たらまだ時間は残つてるので勉強でもじょとと思った。

「まだまだ世界は広い…」

これでも歴史は好きなんだけど教えるとなると広い知識が必要だと思つので僕はそれぞれの時代と地域に分けて覚えていく。

「はう…ネギ君は英語だから楽なんだろうなあ…」

とつい愚痴がでる。そりゃあ僕も英国人だから英語はお手のものさ。でも教えるのは別だらうけど…む、楽とか思っちゃダメだ。そんな感じで挫折が見えてくる。そうおもって僕は前の世界史教本に集中した。

「 ハントリルンが… ぶつぶつ…」

ピピッ ピピッ

僕がセットしておいたアラームがなる。7時間の放置が終わつたみたいだ。

「 よし。あとはこれを入れてつと…あとは煮る。えつと…沸騰しない程度で30分か。」

僕は温度を7~80 になるようにして30分待つ。その間も教本をみて覚える。

「 ムツソリーー失脚… ぶつぶつ…」

ピピッ

また30分が経過する。

「 次は固める…えつと…冷凍庫…だと時間かかるか…じゃあ…」

僕は箱を取り出す。箱は一重になつていて中の箱の外側にも空間がある。

「えっと…冷却用のはつと…これだけ?」

僕はラベルに『ice spell』と書かれたものを出す。確か氷系の魔法をこめたやつ…だったかな。一応液化してある。

「これを外側にいれて…両方の箱のふたを閉めてつと。」

僕は箱を閉める。とすぐにカチッと音がなり、外側の箱を開けると液体がなくなっている。中の箱を開けると…

「うん、固まってる。」

固形になつた僕のオリジナルの薬。

「『思い込み薬』完成 さ、これを切つて何かに包んで…箱にいれて…あ、あと注意書きつと。」

僕は注意書きに「水に溶かして使うこと!でないと効果が強すぎる!」とかく。

「そだ、使い方かないと意味ないや。」

使い方と書いた紙に「この薬の水溶液を飲む際にこれはどんな薬、と思い込むとそのとおりの効果がでる。そのかわり例として『強くなる』などは実際には強くなつたりしないので注意。惚れ薬として使うなら『これを飲んだら自分が意中の人と自分を好きになる』などと考えてつかうこと。『惚れ薬だ』とだけ思つて使うと飲んだ人を見た人全員が飲んだ人に惚れてしまう。ネギ君、考えて使ってね。一応4個に分割しといたから。」と最後にコメントを入れて包んで完成。

「よし、これで終わリッと……あ、そうだ。いろいろ切れちゃったから学園長に頼んで送つてもりあつと。」

とこつわけで僕は出来た『思い込み薬』を持って出た。外はもう5時、午前1時だ。

「さつてと僕ももう一回寝よう……」

とこつと僕は眠りに着いた。

午前7時。僕は目を覚ました。

「ふあ……ちよつと遅いかも……」

とつあえず簡易的なキッチンがあるので朝食をパパッとつくる。と

「ウルルーおはよう……」

バンッと思い切り扉が開きネギ君が来た。

「おはよ……ふあ……あともつと静かに入ろうよ……ふあ……

僕はまだまだ眠いのかあぐびばつかしてゐる。

「『メン』『メン』でや、昨日書つてた……

「ああ……それは……たしか机の上に包んで……

「「」れ？」

「あ、うん。とと、」ぱる「」ぱる。」

僕は箱を渡すとともに朝食を完成させる。

「ありがとウルル！」

「うん。あ、ちゃんと使い方書いておいたから読んでね。一応今説明しどぐ？」

「うん…大丈夫！僕一回戻んないと。じゃあまた朝のH.Rで。」

「そっか、うん、またね。」

そうして颯爽とさつていいく。ネギ君、なんか台風みたいだね…

「や、僕は朝」はん食べて早く行かないと。」

と、こうことで朝食を食べて、着替えをして…

「髪…」

びつじょつかと考える…そのままか、それとも短くするか…と考えていると

「ウル、遅いぞ。そろそろ遅刻だ。」

ちよつじょくデイルが来た。

「ねえデイル、髪、ビビついたらことと思つ~短くしたほうがいいか長いままか…」

「ふむ…別にビビつでも合ひ思つが…とつあえず今のことだ。早くしないと職員会議が…」

「ふえ…? 職員会議…? 今日そいつあるの…? はわわわ…とつあえず結んでいけば…こいつそ藥…」

僕はあわてる。職員会議があるのは聞いてなかつたから。なんでも新任の僕たちの紹介をするとか。

「ウル、あわてて何も手がついてない。結ぶの面倒だから…ほれ。」

デイルは僕の薬棚から一つの薬を出してきて僕に渡す。『髪を短くする薬』だ。

「とりあえず髪のことは放課後でいいだる。さ、行くぞ。」

「へう…あ、待つて…」

僕は薬を飲む。と髪がすつと短くなつていく。その後、僕はコートなどを着て、司書室をあとにした。

職員会議のあと、ネギ君はちょうど2-Aの授業だったのでそのまま教室。僕は1限はどこの授業もなかつたので…

「なんで保健室にくるんだよ。自分の仕事はなにかないのか。」

「だつて一応宿題とかはした…あ、宿題つていつのは僕が僕に課してやつだか。」

僕は保健室にいた。デイルに相談したくて。

「ねえデイル、朝も言つたけど僕の髪、長いほうか短いほう、どっちがいい？」

「どつちがつて…それはウルがきめたらいいんじゃないのか？」

「へう…だつて僕はどつちでもいいかなあつて思つてるし…」

「だからと言つて僕に聞くのもどつが…」

「あ…やつぱつやつだよね…」

「まあ僕は長くても短くてもウルはウルだしどつも変わんなこと。  
…しかし長いとあれだ。女の子に見えなくもない。」

「ふえ…? 僕そんなに女々しいの?」

「いや、そういう意味じゃない。日本語ちやんと理解したのか…  
だから、長い髪でその可愛い顔、女の子に間違われてもおかしくない  
いってことだ。」

あ、そういうこと…って女の子に見える…? それはやばいかも…今は完全に女の子だし…

「あ…やつぱつ短くしないこと…」

「まあどうするかはウル次第だ。どうかしてでも髪をのばす薬くらこウルなら作れるだろ。切つて失敗したと思つたらまた伸ばせばいいんだ。」

「なるほど……やうこつ」ともできるかな。

「うへん……とりあえず保留つことにする……あ、そろそろ一限終りだね。僕2限は2・Aなんだ。じゃあね。」

僕は保健室をあとにした。

とつあえず適当に資料とかを持つて2・Aに到着。

「あう……開けれない……」

両手ともふさがつて開けられなかつた。あう……なんでそんなことこの頭が回つてなかつたんだろ……

「あ、ウルル先生。今お開けしますわ。」

「あ、ありがとウル先生。」

「いえいえ。」

と、ひょいひょい入つたといひでチャイムがなる。

「きつーつ、氣をつけ、礼一、着席ー」

ちゃんと礼をしてから授業開始だ。

「えつとじやあ授業を始めます…」

あ…やつぱり緊張するな…

「引継ぎなので…教科書は…76ページ…であつてますか?」

「大丈夫ですわ。ウルル先生。」

ありがとうございますといつてそのまま授業を進める…

- side アスナ

「引継ぎなので…教科書は…76ページ…であつてますか?」

…ネギと一緒にきたあのウルルって子…やつぱり魔法使いなのかしら…

私はかんぐる。ネギが魔法使いとわかった。一緒に来たあのウルルってガキもまた魔法使いなのかも…でも普通に飛び級つてことも…あ…！わかんない！

「えつと…神楽坂さん…なにかわからないといふでもありましたか?えつと僕、まだまだ未熟で…」

「え？ あ、 なんでもないです！ 」

その後、「 いらーアスナーウル先生困らせるな～ 」とか聞こえてくる。逆、私を困らせるのがウルルって、ガキなのだ。う～やあ～ぱり何かして試そうかしら… そうだ、消しゴム！ 私は消しゴムを少しきぎつて昨日ネギにしたよつて指にせ… つてこれ何もなかつたのよね… まあこいつか。 … GO！

「 あ、 画像録。 」

こいつを見てないのにびっくりと何か反射してからしゃがんだようにみえた。まさか消しゴムに気づいたつてことは… もう一回… 行け！

「 は、 まつべりあさん… 」

ひょいひょいしゃみで頭が下がつたところに消しゴムが通過。なによ、なんで避けれの… ？

そのまま。授業中、タイミングを変えて何回もやつたが結局当たることなかつた…

slide out

「 では… ちょっと早いですが終わります。 」

「 きつーつ、 気をつけ、 礼ー 」

と礼をしたらひょいひょいチャイムがなる。ほ、よかったです。無事に授業

できた…にしてもなんであんなに消しゴムのからがとんで…多分アスナさんが飛ばしてたんだろうけど…  
僕は教室をあとにす。

「あ、ウルル～。」

「あ、ネギ君。」

ちよつとビヤニにネギ君が。

「初授業、どうだった？僕は失敗ばかりで授業できなかつたんだけ  
ど…」

「うん、僕は大丈夫だつたよ。…あ、そういえば多分アスナさん、  
僕のこと疑つてるね。消しゴムのかけらを飛ばしてきた。」

「あ～～…やっぱり疑うよね…」メンねウルル、迷惑かけちゃつて。

」

「うん、当たつてないからこけど…多分そのうちあきらめると  
思つし…あ、僕次は他の先生について授業見るんだつた。じゃあね  
ネギ君」

「あ、うん」メンね。」

僕は次の…確か2-Fが次だつたのでそのクラスへとすすんでいつ  
た…

放課後。

「まー……やつぱり他の先生は授業つまいなあ……僕も見習わないと……」

僕は廊下を歩きながらひつづく。とどいた音が聞こえた。

「なんのおー」「ウルル危なー……避けーーー」「何ー?」

ダダツと何人もの生徒がネギ君をおひ……あれ……?なんかす?」  
ギ君が恋しい……

「待つて!ネギ君ー!」

僕も追うみんなの中に紛れ込む。そして先頭、そのままネギ君に追いつく。

「どうしたのネギ君?」

「ウルル!それがあの薬、固形のままつかつちやつて……ゴメン!」

なるほど……惚れ薬と思い込んで固形のままのんだってこと……

「大丈夫、あれくらいの大きさならじきに止まる……あ、こいつ。」

僕は空き教室にネギ君を連れ込んだ。そして鍵を閉め、息を殺す……

「……ふう……行つたみたいだね……ほんと『メンね、ウルル。君まで巻

き込んじゃつて…

「ううん、大丈夫……それより……」

僕はネギ君に近づく。

「え? どうしたのウルル?」

「なんでもないよ…」

「ふえ！？ちよ、ウルル！！」

ネギ君すす

「ハムー！ あんたの男どもしてなにせんでんの？」

アスナさんの声が

ハンツと扉が蹴破られ僕たちのほうに飛んでくる。僕は無意識に防  
御魔法を使う。そう、扉をはじいたのだ。

んな!？」おおやべで

僕はアスナさんに抱きかかえられる。

「は？！？僕は何を…」

僕は意識を通常に持ち直した。多分惚れ薬と思い込んで使った結果  
だろう…あれ？これってどんな思い込みで…

「はわっ！アスナさん！？助かりましたあ……」

「これで一日は片付いた……と思つた。」

「ねえ……ウルル先生……あんたも魔法使い……なんでしょ。」

「ば……れ……た……？」

「なんで……？」

「さつき私が飛ばした扉、なんらかしてはじいたでしょ。」

「そ、それは僕が危ないとおも……いいよネギ君。」でも……」

僕はアスナさんから離れる。

「できればネギ君と同じように黙つててほしいんですけど……そうです。僕も一応魔法使いです。でも黙つていられないというなら記憶を、ネギ君の分まで忘れさせます。……大丈夫です、副作用も何もない、この薬でなら何も苦しまず、かつ一瞬で忘れられます。しかしこれ、数日分の記憶を失わせる薬なので記憶の混濁が起こりますので……まあ、どうします？忘れます？それとも黙つてくれますか？」

僕は薬を取り出しみせながら交渉する。薬は奇妙な青、緑、紺……そんな変な色をしている。かなり齧るにはいい材料。と言つてもほんとにこれは記憶をけす薬ではない髪を短くする薬。いつ伸びても大丈夫なよつこもちあるいてたやつだ。

「なによ、おどすつての？」

「いいえ、交渉です。多分ネギ君からも言られたのでしあうが僕は今仮免期間です。ばれたら連れ戻される、悪ければオコジョにされる。ちなみに僕、ここで言つと卑怯なのですが身寄りがありません。つまり孤独。両親は2歳のときに他界。僕はそのときにから記憶があります。ずっと孤独に生きてきました。僕は今この楽しい生活、なくしたくありません。…わあ、アスナさん。最後に聞きます。記憶を失うか、黙つていろか、僕たちのことをばらすのか…」

「ウルル…性格変わつてる…」

「それだけ真剣なんですよ、ネギ君。」

僕はそういうもアスナさんからは田をやらない。僕はずっとこちらのように見つめる。

「く……つてまあもともとネギの地元で黙つてゐつて言つたんだしあんたのことも黙つてゐつてもともときめてるの。いちいちそんなこと言わないでもいいのに。しかも…なんか同情しちゃうじゃない。」

「

「ほんとこ…だまつてでもうれるんですね?」

「そうよ。ネギは黙つてあんただけばりあつてのもおかしいでしょ。」

「…はう~…よかつたあ…」

僕は気が抜けた。もじばらされたらつて思つたらつて…

「あつがとひ「ゼ」ことあつ～」

「…ねえ…それ、本物の記憶を消す薬なの?」

「ふえ?あ、これは違いますよ。まあ僕の常備薬つてヒルギです。」

「なんだあ～…」

え?なんで落ち込むの?…よかつたあとが安心するとこがじゃないの??

「まあいいわ。わ、わざと帰るわよ。」

そういうて教室の外に出て行くアスナさん

「あ、待つてください…!」

それを追いかけていくネギ君。

「あ、ウルル!あとで図書室に顔出すわ。じゃあ…」

「うん…」

一人はいなくなり僕だけ残される。

「はう…ホントによかつたよお…もじばりすとかいわれたら…へう…もうこいや。帰るわ…」

僕も今いる空き教室をあとにした。

その後。

「はい～… 今日がこのあつて疲れたなあ…」

僕はうつむき休憩室にホットミルクティーを淹れる。

「学ぶこともあってたし… 魔法のことは… へう…」

ばれてしまつた。やれやめとやせこほど黙つててくれるつしこだし氣にするのはやめよつ…  
ヒカルはトントンヒカルをたたへ音。多分ネギ君だね!。

「はーー。」

僕はドアを開ける。ヒカルにまたかえ…え?

「お邪魔しまーすー! ウル先生こんばんわー」

「え? なに? 何? ひひひひひ事?」

「いあんねウルル。僕の部屋で勉強会してたんだナビアスナホと  
追って出でやつて…」

「なんめえ… で、なんで同書室? ? ? ?

「他の寮の部屋で云こといひがなかつたんですよー。」

「やつなんですか…」

とりあえずみんなを中に入れる。総勢ネギ君含むで5人。

「「」」がウルル先生の生活空間ですの…」

と叫ぶさん。

「へえ～結構片付いてる～。」

とハルナさん。

「ウルセンセ、こんばんわ。」「こんばんわです。」

とのびかさん、次いで夕映さん。

「あれ？ウルル…そんなに髪長かつたっけ？」

…は、忘れてた…

僕の髪、ちょうど帰つてきたあたりでもとこもびつたんだ…ネギ君  
しか来ないつて思つてたから…

「あの…えと…」

みんなが僕のほうを見て…え？なに？なんで近づくの？

「ふえ？なに？びつしたの？」

「あの…ウルセンセ…髪、いじらせてもらつても…」

「むしろこじる~」

「あわあ~！~」

と、僕は取り押さえられた。そして適当ないすに座らされた。

「あ~ここです……せりせりで手入れも行き届いてるです……」

「あ~…みなさん勉強しにきたんじゃ……」

「まあちゅうと休憩つて」とド

「あ~…」

「あ~…」

そのまま20分くらいはいじられました。

でその後、少し勉強して生徒たちは帰つていった。残るのは僕とネギ君。

「へう~…なんでこんな…」

僕はツインテールにされたりポニーにされたり、最後は後ろ真ん中あたりに二つ編みを作られそのまま。

「まあ…その…似合つてるよ~。」

「うん、ありがと…じゃな~よ~。」

「おせせせ」

と笑い話になる。つてそつだ。僕はこちこちネギ君に残つてもひつたんだ。薬のこと聞くためだ。

「ねえネギ君。薬のことなんだけれど……」

「あ、あの……用法だけみて……で注意書きの」とぱつとみただけで……

その……」あんなもん……

つぱつぱつ圓形のままでそれまわつわつしてたよ。

「なんでネギ君が？」

「やの……アスナさんが自分がのめつて僕にひょいっと……」

なるほど……飲まされて……じやあ……

「ネギ君は飲み込んだときぱつぱえてたの？」

「えと……多分これを異性を惚れさせる薬と思わせて飲んでもらえれば……つてかんじかな？」

ふむふむ……なるほど。それなら確かにあんなふうになるか……

「あれ？ そつしたらおかしいな……なんでウルルまで僕に……ウルル、男の子だよね？」

「へへー？」

しまつた……なんでそう切り返すのかな……あう……ビリビリええば……

「おかしいなあ……どんな人でもと考へてたのかな……それなら途中すれ違つた先生とかも……ぶつぶつ……」

あう……ネギ君考へ出しちやつたよ……ほう……本当のじとまつたほうが……でもネギ君に嫌われるかも……あうあう……

「ウル～いるか～？つとネギもいるのか。」

ちようじやこにデイルが来る。あわ、このことはデイルも知らないはず……どうじよみ……

「ねえデイフォルトさん。もし異性が惚れる薬を僕が飲んでウルルが僕に惚れるつてことは……」

「は？……あ、そうか。ウル、今日君、女の子の日だ。確か昨日は男だったはずだ。」

「え？……なんで知ってるの？……」

僕は驚く。だつて僕はこのことは誰にも、デイルにすら言つてないはずだ……

「まあそれは……その……この前着替えを見たときに……ね。」

「！……？……そんな！……みてたの？僕の裸を見たの！？

「見たの！？見たんだね！？見たんでしょ！？あう……僕もうお嫁……

じゃなかつた、お婿にいけないー！」

「まあそのときは僕が…じゃない。で、今日は女の子なんだろ。多分の領域を出てないんだが僕の予想では一日周期で男女が入れ替わるんだろう。多分一年くらい前からか。」

「……うん…今日は女の子なの。多分そろそろ変わる頃かな…」

僕とデイルはそんな会話をするとネギ君はついてこれないので頭の上にハテナを浮かべている。

「ねえウルル、ディフォルトさん、どうこういつこと…？」

「ああ…それは、僕が説明するよ。」…だそうだ。」

僕は一步ネギ君のほうに近づく。

「えっとね。僕は一年前に…（略）」

僕はネギ君に説明した。僕が薬を作つて失敗したことと性転換のことを。

「へえ…ウルルも大変だったんだね…」

「まあ性を隠すつていうのは難しいな。」

「僕の失敗だし仕方ないよ。…つとネギ君、寮はそろそろ門限じゃない？」

「え？あ、ホントだ！じゃあウルル！また明日！」

急いでしたくしてネギ君は出て行った。

「セーティル……」

「ん？ なんだ？」

「僕の裸…見たんだよね…」

「あ…」

僕はセーティルに少しずつ近づいていく。そして田の前に。

「しゃがんで。」

「あ、ああ…」

「まさとお嫁…お婿にいけなくなつたりまへつてもひひだから…」

僕はそつとだなつてセーティルを部屋から追いで出した。

## 2限目 新薬『思い込み薬』（後書き）

とこつわけでね。2話目終了ですよ。

ウル君は今後どんな風になるのか楽しみです^\_^  
ディルとの関係はどうなるのかねww

では、また次回お会いしませう^\_^ノシ

### 3限目 ウルルとネギの最終課題（前書き）

どうも、ゴキです！

スランプ脱出できずにつながります。。。

プロジェクト組み立てるのに3ヶ月かかりました。。。 (2週間前くらいから友達の力を借りて急ピッチで組み立てました。)  
でもかなり原作に会つように練つたつもりです^\_^  
ではじめ～。

### 3限 四 ワルルとネギの最終課題

いつものように清々しい朝。僕はいつものように行く準備を整えてのんびり朝食を摂っていた。

「はあ～、やつぱり朝はミルクティーでのんびりだね～」

「そんなんのんびりで大丈夫なのか？まあ僕には関係ないけどね。」

「えっと、あと15分くらい余裕が…ってなんでデイルがここにいるのー？」

僕の隣にはいつの間にかデイルが座つて自分で入れたのコーヒーを飲んでいた。

「まあ本音を言えば朝食をたかりにね。建前はウルの様子を見にきた。」

「言つ順番逆だよねそれ！」

「まあまあいいじゃないか。っと、ウル、時間だ。今日は1限に授業あるんだろ？」「…」

ぱっと僕は時計を見る。すると行く時間5分前だった。

「そりだー！今日は1限からだー！んじゃ、行くねー！」

「ああ。鍵は僕が閉めておくよ。」

僕は急ぎ足で「司書室をあとにした。

校舎の前、今日も人でごった返している。  
僕は通り過ぎていく生徒たちを見過ぎし何度見てもす、いなあと思  
う。

「あ、ウルル先生おはよー！」

「おはよー、ウルル先生。」

「ふえ！？あ、おはよー」わこます！

いきなり後ろから話しかけられて僕はびっくりする。後ろを向くと  
そこには

「えと…大河内さんと春日さん…ですよね。」

「お、覚えてるんだ～。」

「あの、これでも2・A副担ですから…／＼

「んじゃ、私も行くね～」

そう言って二人は先に行く。そのあとにも何人かに挨拶された。  
ちゃんと生徒の名前。いえてた…よね？

それだけ考えて僕は1限の授業のクラスに向かった。

「なるほど。ネギ君もウルル君もどちらも上手くやつておるか。」

「はい。ネギ先生のほうは生徒との打ち解けも早く授業内容もがんばっています。ウルル先生のほうはもともと対人が苦手なので一対一で話すのは苦手ですが生徒の名前は覚えています。また授業内容はネギ先生より充実しています。」

「学園長室に園長としづなの二人。一人の子供先生について話している。」

「ティフォルト保健医は功績もさながら、保健室登校の生徒の零化まで報告が来ています。」

「ふおつふお。ティフォルト君は優秀じやの。ならば彼は4月から正式採用でよさそじやの。（課題で出そつとしたことを先にやつてしまふとはの…）」

「ネギ先生、ウルル先生、この二人。私は一応合格点を出してもいいと思つてますが…」

「そうじやの。ならば二人も4月からは正式採用かのう。『苦労じやつたしづな君。』

二人は握手を交わす。そして手を放すと園長の目が変わる。

「ただし、一人にはもう一つずつ、課題をクリアしてもらおうかの。才能ある立派な魔法使い（マギスティルマギ）の候補生として…」

「あわわ、質問に答えてたらワタ開始の時間過ぎちゃった。」

僕は急いで2・Aに向かう。それにしても他のクラスをみると何かピリピリした感じを覚える。

なにやらノートやらを持ち寄って話し合っている。

「何があるのかな…」

ボソッとつぶやいて僕は先を急ぐ。

クラスの前に到着すると何故か中ではしゃぐような声が聞こえてくる。

何かレクレーションでもやつてるのかな…？

と、思つて僕はクラスの扉を開ける

「「「バカ五人衆参上…」」

「…………え？」

ドーンと戦隊物のようだ煙が上がるよつた感じを想定したようにポーズを決めている。かつこいいよつた氣もするが、このポーズを決めた全員、半裸である。

「何これ…？」

「あ、ウルル～！」

僕が立ち止まって睡然としていると横からネギ君の声。

「これ、どうこう」となの？」

「それが期末テストが近いから勉強会しようってことだったのに…」

あ、他のクラスがピリピリしてたのはそういうことだったのか…

「それで、うちのクラス、万年最下位みたいなんだ…」

「ふえ…？ そうなの…？」

「うん、図にするとね…」

そういって簡易的な成績表のグラフを出す。

「なるほど…トップにいるけど下辺もいる…したの五人…さつきの…」

バカレンジャーって言つてた五人だ…

「それでねウルル、僕の最終課題がね、期末で2・Aの最下位脱出なんだつて…」

「ふえ…？ そうなの…？」

「うふ……えへっしょ……」のままじやネギ君と離れ離れ……あつ……

あわわわ……じつじょ……」のままじやネギ君と離れ離れ……あつ……  
じつじかして……

そつだ！ 3日間だけか！ へ頭がよくななる魔法が……でもこれは副作用  
が……あ～う～……

僕は考え込む。周りを気にせざる。

「……セ、ウルセンセ～！」

「ふわ！？ な、なんですか！？」

ぬすひれじよつやく氣づく。のじかさんじ呼ばれてたみたいだ。他  
に周りには誰もいない。いつの間にかH.Rが終わっていたみたいだ。

「あの……今日つて新刊の入荷の日ですか……」

「え？ んと……あー……」

確かに今日せがめに新刊が来てるはずだ……

「他の委員の人も待たせてるかもーのじかさん、急ぎましょうー。」

「は、はいー。」

僕らは図書委員の人たちに会えてある新刊の到着場所に急ぎ、皆こ  
加わって運び作業、そして納書チェックとやらのことをこなしていく  
た。

「ホントに面をみすみません！僕が遅いばっかりに少し遅くなつてしまつて…」

「プルルルル… プルルルル…

納書チェックの途中、受付の電話が鳴る。

「電話だ、なんだろ？… はい、図書館島総合受付です。」

「おおウルル君かの。わしじゃ、今からひと学園長室に来てくれんかの。」

「え、あ、学園長ですか？ はい、じゅあすぐ向かいりますね。」

「すまんの。ではまつとる。ふおつふお。」

それだけで電話は切れる。あ、呼び出し内容とか聞いてないや…

「すみません面をみすみません、僕ちよつと学園長に呼ばれてしまつたので後はお願いしてもいいにじょうか？」

「あ、はい。後はこうじで何とかします。チェック後の印鑑だけお願いしますね。」

「では、終わつたら図書室に置いてこいでください。では行つてきます。」

僕は図書館島を後にした。

向かって走る途中、どこから声が聞こえる。

「誓約の黒い三本の糸よ

ネギ君の声だつた。

僕は声の聞こえた近くの林を見る。

「我に三日間の制約を

ネギ君は何かの魔法を……あ、僕は急がないと学園長に呼ばれてる  
んだつた！

僕はその場を後にする。

「あれって……確か封印の……ネギ君、どうしたんだろ……」

学園長室につく。僕はノックをして学園長室に入った。

そこで話したのはネギ君に課題が出たように僕にも課題を出すとの  
ことだった。

その課題の内容は……

図書館島に戻り一応監がまだいるか確認する。

「まだ、だれがいますか……？」

返事は返つてこない。誰もいないみたいだ。

僕はいないのを確認し司書室に戻る。そこでチェック後の確認印を押していく。

「……これで最後つと。」

最後の一枚に印鑑を押し終えて一息つく。

「へうへ…印鑑押すだけっていうのも疲れるなあ…」

僕は席を立つてミルクティーを淹れに行く。

「そういえば僕の課題…」

なんでも『動く石像を創れ』とのことだった。サイズとかは指定されなかつたけど…『大きい方が評価は高いの、ふおつふお。』とも言つていたような…

「どつちにしてもこの司書室内じゃ創れないよね…早く作るに越したことはないし別荘で作っちゃおつと。」

材料とかは多分別荘内にあるもので足りるだろつと思つて僕はすぐに別荘に籠る。

篭つて6時間。大体の型はできた。後はビリ動かす形式の「ゴーレムかだ。

「命令タイプか操作タイプか……命令タイプはちょっと難しいんだよなあ……」

命令タイプは半自動だから思考経路がいるからなあ……操作でいいかなあ……

「操作でいいや。こっちの方が汎用性あるよね……？」

そしてまた僕はゴーレム作成に時間を費やす。

別荘に入つて計12時間が経過した。

「あとは魔法でゴーティングして完成だあ……」

僕はエーテル水をゴーレムにかけ、崩れたり、簡単な衝撃じや壊れないうちに鉄くらいの硬さを演出した石にする。

「これで完成……かな。」

計13時間経過。ゴーレムは完成した。

「これで後は学園長に渡して終わり……なんだけビリ動かすこれ……」

少し大きめに作つたので持つていぐには少々重い。

「うん……まあいつかあ。明日考えよう。ふあ……」

僕は別荘から出て寝ることにした。

トントン

僕がパジャマに着替えてベッドに行こうとした時、ノックの音がする。

「こんな時間に誰かな……はい。」

僕は扉を開ける。とそこには

「夜分遅くにすみませんです。寝る前で申し訳ないのですが一緒に来てもらえないですか?」

えと、綾瀬さん、後ろにのどかさんもいる

えと……なんのよ、ぐれはわかるです。」「……わかりました。」「

綾瀬さんが有無を言わさないような迫力で迫るので僕は yes で答えてしまった。

後ろのほうから早乙女さんが飛び出してきて僕は捕獲され、そのまま連れて行かれてしまった。

連れて行かれた先にはバカレンジャーの眞さんとなぜかパジャマ姿のネギ君が集合していた。

「あれ…眞さんどうしてここ…」

「実は私たち、今から図書館島の地下図書室に本を探しに行きたいのでウルル先生には引率をお願いしたいのです。」

「そ、そなんですか？あの～それならネギ君が…」

そう言って僕はネギ君のほうを見る。いかにも眠そうにあぐびをしたりしている。

「あ、ネギ先生もいたですか。それならびらかで…」

「べ、別に一人が引率でもよくない！？」

いきなり話を聞いていたらしい明日菜さんが横から言つ。

「いえ、ここはどちらかの先生に残つてもらい、私たちが図書室で勉強しているということにしてもらつたほうが何かと問題おきなくていいです。」

「えー…眞で行つたほうが絶対楽しいよ～」

またまた横からまき絵さんが会話に入つてくる。

「いえそこは…」

みんなが言い合っている中、明日菜さんが僕とネギ君に耳打ちして  
きた。

「トラップがあるみたいだから危なくなつたら魔法の力で私たちを守つてよね。」

「ふえ！？ 地下にはトライアングルあるんですねか！？」

גְּדוֹלָה וְתָהָרָה

うえへ ドラッカかあ 恐いなあ

「あの… 魔法なら僕、封印しましたよ。」

二  
二  
二

「ええ～～！？」

僕と明日菜さんが一緒に驚いたのもつかの間、明日菜さんが何かたくらんだような顔をしてから、目を光らせて僕を見る。

「やつぱつ、じゅうじや、  
図書館のじとだしウルのほうが適任じゃないかなあー」

みんなが口論してる中にわざとらしく大きな声で明日菜さんが言つ。  
「そうですね、やはつこにはウルル先生についてももらつたほう  
がいいです。」

「えへ、皆でのせうがいこのこと。」

「もう時間がないし行こう。」

「ふえ～！～？？」

明日菜さんは僕をつかんで入り口のまつに向かっていく。

「ではネギ先生はのどかたちと残って何かあったときのフォローをお願いします。」

そうして、僕たちは図書館島地下への扉を開いたのであった。…

### 3限目 ウルルとネギの最終課題（後書き）

このまま図書館編続きますへへ

多分3話分くらい？

最後の最後で大どんでん返しがあるのかな？あつたらいいな…

一応プロジェクトは出来るつもりなんで早めにひっさしへこきたいと思  
います。

ではまた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0736q/>

ネギま!～もう一人の子供先生ウルま!?(仮)

2011年10月7日04時44分発行